

女友だち

ローザ・ガイ 加地永都子訳

ダウンタウン・ブックス



晶文社

著者について

ローザ・ガイ

トリニダード生まれの女性作家。ニューヨークのハーレムに育ち、ドキュメント『ハーレムの子どもたち』(晶文社)などで、その活動を知られる。本書をはじめ、黒人の若者たちの生きかたを見つめた作品で、全米のヤングビープルたちに熱い共感をもってむかえられている。

訳者について

加地永都子(かち・えつこ)

一九四〇年東京生まれ。東京女子大学文理学部卒業。アジア太平洋資料センター理事、季刊『世界から』編集者。

訳書『ミレット』『性の政治学』(共訳、自由国民社)、『アンジェラ・デービス自伝』(現代評論社)、『ニューフィールド&ダブル』『ニューヨークが死ぬ時』(筑摩書房)ほか。

ダウンタウン・ブックス

著者たち

一九八〇年十一月二十五日発行

著者 ローザ・ガイ

訳者 加地永都子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二丁一一二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六二二七九九

堀内印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社まで許諾を求めてください。
(検印廃止) 落丁・乱丁本はお取替えます。

女友たち

ローザ・ガイ 加地永都子訳

ダウントウン・ブックス



晶文社

Have a nice story

本を読むたのしみは、いい友人と話すたのしみに似ている。熱い珈琲をまえに、ふと手にした一冊の本をひらく。すると、そこにおもいがけない友人がいて「やあ」と親しく声をかけてくる。いい物語には、いい時間がある。

きみが友人とそこで落ちあうことのできるような本。同時代を共にできる本。物語の中の友人たちと話しながら、一日のなかにゆっくりとしたいい時間をつくるのだ。いい物語を読んだあとは、何かがちがってくる。きみは自分のほんとうの感情をみつけることができるかもしれない。

長田弘(詩人)



女友だち

ローザ・ガイ 加地永都子訳

カウンタウン・ブックス

Rosa Guy :

RUBY

Original Copyright © 1976

by Rosa Guy

Japanese Copyright © 1980

by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

Japanese Translation rights arranged with

The Viking Press, New York through

Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

女
友
だ
ち

ブックデザイン

平野甲賀

第一部

1

ひとりぼっちのさびしさが、蒸気のようにおなかの下の方から上ってきて、心臓をおさえつけたかと思うとのどまでこみ上げ、声帯をひくひくさせ、いまにも飛びだそうとするのをようやく飲みこみ、叫び声やヒステリーや涙の雨の発作をくい止めた。泣く理由なんてほんとうに何もなかったのだ。窓の外をみながら、ルビーの濃いとび色の目は、通りの向うの褐色砂岩の複雑なデザインをじいっとみつめていた——石に彫りこまれた細かな美しいデザインで、細部はふるい物語が題材になっていた。

ルビーはもう一度、男たちが家具を詰めこんでいる引越したトラックの方へ目を向けた。マリ안의一家を永久に連れていってしまうトラックだ。引越しはニューヨークの生活の一部、一軒の家からアパートへ、あるいは別の家へ、ある通りから別の通りへ、ある区から別の区へ、ときにはこの都会と永遠に別れを告げて、人びとは絶えず引越しをしている。ここハーレムでは

たしかに移動はもっと激しいにちがいない。これまでもとてもたくさんの人たちがこの通り、町内から越していった。こここそ、ルビーがはじめて島から来たとき、とてもきれいですてきなところだと思った町なのだ——あれは二年前だったろうか。

ロビンズ一家が行ってしまっても大損失なわけではない。だから涙を流す必要もないのだ。ルビーと妹とマリ안의三人は急速に仲良くなり、そしてその関係はあつという間に終った。この国では友情とはそんなものなのだ——水のように変わりやすく、昔の優雅な美しい家に代って建てられる現代的ビルのようにもろい。仲良くなるのも壊れるのも簡単で、経験を分ちあうところから生れるきずなや相手を気づかう喜びもない。

ルビーはため息をつき、自分が住むアパートの外に歩哨のように伸びているカシの木に目を移した。てっぺんの枝はアパートの三階まで届いており、曲りくねりながらしっかりと枝を広げ、まだまばらだけれどこれから伸びる様子をありありとみせている。去年の秋、葉っぱが落ちて保護外被におおわれたのに気づいたときから、ルビーはこの木に引きつけられた。一見裸に見える枝の一本一本に沿ってごく小さなこぶができていて、冬の間中、寒さにも氷や雪やつめたい風にも負けず、つぼみを守りとおしたのだ。そしていま、まだ春にもなっていないのに、こぶは大きくふくらみ一刻も早く枝を離れたがっている。

日が暮れてきて、気がつく窓に妹の影がうつっていた。フィリシアはいつものようにソファの上で丸くなり本を読んでいる。突然怒りがこみあげてきて、ルビーの目から涙がこぼれた。フ

急いで褐色砂岩のところへ行つた。階段を二段ずつ駆けあがったかと思うと、その姿は自在戸の向うに消えてしまった。

「友だちだろうとなかろうと」フィリシアが辛らつない方をした。「あの子が通るたびに窓の外を見るのはやめた方がいいわよ。さもないと三日もしないうちにあの子の首がとんじやうわよ」そこでまた本を読みだしたものの、話をもう少し生々しくしようと思つていった。「あのいかす黒い髪が頭がごろごろころがったところへ、車が通りかかつて、どぶへ落っこちるところを想像してごらんよ。ああこわい！」フィリシアは身ぶるいした。

「ばか！」とルビーは妹に向つて吐きだすようにいったけれど、目はいぜんとして自在戸に釘づけて、オーランドの出てくるのを待っていた。さよならをいうとき、どのくらいいてくれるだろう。へそんなこと気にしないわ」とルビーは思った。へ前は好きだったけどいまはちがうもの——前にはとっても好きだったわ。でもいまはぜったいにちがう——

ルビーとオーランドが最後に口をきいてから一年以上たっていた。マリ안의パーティの帰りに——通りを渡るだけだったけど——オーランドが送ってくれた夜いらいだ——彼がルビーにキスしようとして、彼女の父親に顔を殴られ鼻血を出したあのときいらいだ。あの夜いらい、オーランドには一片の勇氣もなかった——勇氣のかけらさえ——。

自在戸が開いた。ルビーの心臓はどきどきし、息もはやくなつた。でも出てきたのは引越し手伝いのひとだった。ルビーはほてつた額を冷たい窓におしつけて、ひたすら待ちつづけた。

日が暮れはじめ、窓ガラスに映るフィリシアの影がくっきり見えてきた。突然怒りにかられルビーはくるりと後ろを向いた。「そんなくだらない本はやめて、あたしと話をしたらどうなの」フィリシアはとびあがった。「話があるって。何の話さ」

「何かの話よ！ 何でもいいわよ！」

フィリシアが指を一本はさんでそっと本を閉じると、ルビーはそれを妹の手からひったくった。ふたりはにらみ合って立っていた。

「だいたいあんた何を讀んでるのよ」

「義和団事件についてよ」フィリシアは意地の悪い口調で答えた。彼女が何を讀もうと、ルビーはほとんど知りもしなければ氣にもかけないのが分っていたからだ。十六歳のフィリシアには、まだ柔和な幼な顔が残っていた。そこへ最近髪をちぢらせてアフロヘアにしたので、若き叛逆者のようにもみえる——若くて丸顔のベビフェイスの叛逆者だ。

「それはいったい何なのっ」ルビーが問いつめた。

「イギリスがどうやって中国人にアヘン売買を押しつけたかっていう話よ。時代は……」

「もういいわ。知りたいとも思わないわ。聞きたくなんかない！」そこでルビーの機嫌ががらりと変った。「フィリシア、あんたあたしを愛してて？」とそっとたずねた。

警戒しながら慎重に、ためらいつつ、フィリシアは言葉をえらんだ。「いるわよ。それがどうかした？」

「知りたいだけよ」またルビーの声がとがってくる。「あたしを愛してる？」

「いるっていったでしょ。もう本の続き読んでいい？」

「だめ」ルビーは叫んだ。彼女の頭の皮は怒りでひりひりした。すごい勢いで妹の目の前まで歩いていく。「だめよ。あたしは夕飯のしたくをしなけりやならないし、あんたは手伝うのよ」むっとした様子でフィリシアは口をゆがめたけれど、静かに慎重にこたえた。「何をすればいいの？」

「台所へ行ってタロイモとじゃがいもの皮をむきなさい」

「いいわ」フィリシアは後ずさりした。ルビーの手が届かないところまでバックしたのだ。

フィリシアが長い廊下を二、三歩行きかけたところで、ルビーの怒りは嘘のように消えてしまった。「あたしに言われたからって行くことないのよ」と彼女は妹の後ろから叫んだ。

「分ってるわ」フィリシアがこたえた。

「それどういう意味？」ルビーは廊下ごしに聞きとがめていう。フィリシアが振り向くと、ルビーは妹の目の中に、自分を守ろうとする意志のほかに怖れも浮かんでいるのを見て、悪いことをしたと思い赤くなった。「こっちへきて本を読みなさい」ルビーは頼みこむようにいった。「手伝う必要はないわ」

「いいわよ、やるわよ」フィリシアは言い張った。「タロイモとじゃがいもの皮をむくわ。ほかに台所で手伝うことある？」

いつもにない妹の従順な態度にルビーは傷つけられた。「無理にさせるつもりじゃなかったのよ。フィリシア」ルビーは妹の手をつかんだ。「あんたはやらなくていい。キスして仲なおりましたよ」

「仲直りする理由なんかないじゃない。あたしは怒ってないもの」

「キスして証拠を見せてちょうだい」

フィリシアはいっそう油断ならないぞという目をしてから、身をかめ姉のほほにかかる唇をつけた。だがルビーはフィリシアの両ほほをしっかりと両手にはさみ、妹の唇の上にキスをした。

「やめてよ、そんなこと」フィリシアはルビーを押しつけ、手の甲で唇をぬぐって、大股で長い廊下を台所めざして歩いていった。

追いかけていって背中をこぶしでたたいてやりたい、という気違いじみた気持とたたかいながら、ルビーは居間の中を歩きまわり、安っぽい壁かけを眺めたり、じゅうたんのごみを拾いあげたり、椅子の背のレース編みをかけ直したりした。そこではっと思いだし、窓際にとんで行ったトラックはとうの昔に行ってしまった。褐色砂岩に囲まれた窓はあかりひとつ見えず、自在戸はそよともしなかった。

みじめな思いがこみあげ、涙がほほを流れた。ルビーはこぶしをかねて泣き声をたてまいとした。泣くことなんか何もないんだ、何ひとつありはしない。強風の中でカシの木の枝が何度もうなずく。

ほんとにあのフィリシアったら、冷淡で、愛情のかけらもなく、おまけにどうしようもなくなまいきな自信屋なんだから。ルビーは、自分が強くて妹をぶったり家事をさせたり、洋服を着替えさせたり、とにかく何でも、フィリシアがあばれたりわめいたり大騒ぎを演じて嫌がることをさせるのが嬉しかった。妹ときたらいつでも何かにつけて、さからうかけんかをふっかけるか、わめき散らしているとしたルビーには思えない——でもいつもというわけでもなかった……

へフィリシアがいない時代があった……パパとママとあたしと三人だけの時代が……あの頃のこと覚えてるわ……よく覚えてる……ママとあたしはよくブルーベイズンへ行っただけ……大きな木々の枝が重なりあって太陽をさえぎっていたあの水の青いブルーベイズンへ……野鳥がさえずり、小さな動物たちがあのひんやりした谷間に水を飲んだり涼んだりしてきたところ、真赤な花や黄やオレンジ色の花が、まわりの濃い緑の繁みのあちこちに咲いていた、そのために繁みはいっそう色濃く、神秘的にみえた……そしてブルーベイズンへ流れこむ滝が決まったリズムで流れ、神秘的な感じをつよめてた……いつだったか夏の暑い日にママとふたりで、長い散歩につかれてあそこへ行行って泳いだり遊んだりしたことがあった……ママが裸になってあの入江に飛びこみ、どんどん泳いで行っただけ。底なしの入江のいちばん底で溶けてしまったかと思っただけ、小さく小さくなるまでもぐって行っただけ……永久に消えてしまったんじゃないかとあたしは思った……ほんとにこわかった、あたしは大声でさげんだ、何度も何度も、泣いて泣いて泣きじゃくった、目の前で消えてゆくママをみながらあの入江の岸で……でもそのときママはまた元